

## 被災者の生の声・叫び～東日本大震災の現場から

特定非営利活動法人レスキューストックヤード  
代表理事 栗田 暢之

### ■はじめに

東日本大震災から半年以上が経過した。もう半年、まだ半年、感じ方は人によって異なるが、共通して言えることは「復興は緒に就いたばかりだ」ということ。そして、まだまだ応援をし続けることが必要だと声を大にして言いたい。なぜそうしたいかは、あの日以来、現場に通い続け、被災者の生の声を聴き続けているからである。叫びにも似た被災者の真実をお届けしたい。

### ■「もうダメかと思った」

70歳代のご夫婦は、あの日、いつもの通り奥様が通院している病院へご主人がお迎えに行かれ、町営住宅の3階の自宅に戻られた。その直後、立ってられない大きな揺れが襲い、どこからか「大津波が来るぞ」との叫び声を聴いた。様々なものが散乱した室内で右往左往しつつ、階下へ降りるより、ここにいたほうがいと判断し、窓から様子を見ていた。しかし、真っ黒な津波は、見下ろすどころか、眼前に迫ってくるのが見え、あわてずすべての窓を閉めた。津波が襲ってきた。

ガラスがしなる。隙間から泥水が入ってくる。「もうダメかと思った」…。幸いにも、直撃だけは免れた。すぐに階段を駆け降り懸命に走り始めたとき、高台の上にいる住民から、「第2波が来たぞ！引き返せ」と言われた。あわてて戻ったが、次の波は3階までの高さには来なかった。再

び階段を降り、夫婦で互いを気遣いながら高台へとよじ登った。雪が降ってて何度も滑り落ちそうになったが必死だった。気がついたら裸足だった。

数ヵ月後、「今度は本当に自分が津波に襲われた。呑み込まれる瞬間までお父ちゃんを呼んだが声がしない…、というところで目が覚めました。恐ろしい夢でした。汗びっしょりでした。」

被災者の多くがあの日、地獄を見た。そして今なおフラッシュバックに苦しめられている。こうした方々へのケアは専門家に期待する声が多い。

しかし普通の市民はなかなか専門家と出会えない。当然ながら事態が深刻な場合は素人が安易に口出しすべきではないが、むしろ専門家の助言を得ながら、数では誰にも引けをとらない多くのボランティアが、「お元気ですか」「お茶でも飲みましょうか」「お土産もって来ました」などと、寄り添い続けることで、どれだけ被災者に安堵をもたらすかは言うまでもない。まもなく冬がやってくる。誰も訪れない閑散とした地域をつくってはならない。行ける者はどどん通い、厳しい寒さの中にも温かいまころころだけは届け続けたいものである。

### ■「自分も津波に呑まれたほうがよかった」

震災から半年を経た津波災害の現場を歩いた。瓦礫と呼ばれる廃棄せざるを得なくなった様々な漂流物の多くは片付けられ、家の基礎以外は何も残ってはいない。その一角で、そこに住居があったというある初老のご夫婦と出会った。「毎日ここ

に来ては海を恨めしく眺めているんです」と。息子たちは数年前に独立し、これからの人生を夫婦で静かに過ごすつもりだった。それを津波がすべて奪い去った。「本当は小さくてもまたここに家を建てたいと思う一方、やっぱり行政が勧める高台への移転の方がいいのかどうか。」現在は仮設住宅に入居されているが、狭いし、暑いし、暮らし難さで息が詰まるので、結局毎日ここに来ているという。「ゆっくりじっくり考えてください。

全国の本当に多くの方が皆様方を応援したいと思っていますよ。」としか言えなかった自分も情けないが、返ってきた言葉に絶句した。「いずれにしても、もう家なんか建てられない。お金がありません。こんなことなら、自分も津波に呑まれた方がよかった。生きているのが、苦しくて、辛くて…」。

「希望」や「生きがい」などの言葉が被災地内外で飛び交っているが、掛け声だけではもはや手遅れになる。もっと具体的な救済策、はっきりとした復興ビジョンが早く提示されないものか。そして私たちには何ができるのだろうか。「がんばろう」だけでなく。

## ■「放射能がついたものを持ち込むな」

「仕事が見つからない」「泣きながら…」

全国各地へ5万人以上の方がいわゆる「県外避難者」として避難されている。筆者の地元、愛知県にも約500世帯・1,300人の方が、主に福島県から来られている。その支援活動に携わる中で、驚くべき実態が深刻な課題となっている。

ある方が引越しをされ、福島の自宅からわずかに持ち出した家財道具や生活用品を運び込んでいると、車のナンバーを見た心無い住民から、「放射能がついたものを持ち込むな」と言われた。怒りを超えて絶句でした、と。またある方は、子ども4人とお腹にもう一人が宿るお母さん。最初は母子

だけで避難するも、各種申請のために役所に行くだけで大仕事。慣れない土地での子育ての不安もピークに達し、ついにノイローゼ気味に。ご主人はやむなく福島での仕事を辞めて家族のもとに来るも、「仕事を探しているがなかなか見つからない。家族のために、家族のそばで普通に暮らしていた日々を返して欲しい」と。

また福島県内に住むある方は、例年通り、近所のおじいちゃんが自分の畑で育てた野菜をお裾分けで持ってきてくれるが、それを子どもたちに食べさせても大丈夫かどうか分からない。結局、「泣きながら捨てています。申し訳ない。」と。自分や家族、特に将来ある子どもたちの「生」を脅かす目に見えないものが突然降ってきて、その周辺に住む人たちはもとより、意を決して避難という選択をされた方々も一人ひとりがそれぞれ異なる事情を抱えながら、もがき苦しんでいるのである。原発問題は、福島が特別ではなく、全国民の課題として受け止めなければならない。ましてや、心無い言葉で、これ以上人が人を傷つけることがあってはならない。

## ■おわりに

「被災する」ということは、人生にとっての一大事である。一大事の時に「助けて」と言うてはいけないのか。言ってもいいではないか。問題は、私たちにその声が聴こえるか、聴こうとしているのかどうか問われているのだと思う。さらに言えば、むしろ「助けて」と言えない人の声なき声を聴かなければならない。東日本大震災による被災者の苦悩は、時間の経過と共に、ますます個別化、深刻化していくであろう。ただしその生の声一つひとつは、一人の訴えだとか、単なるわがままでないことは明白である。まずは現場に耳を傾け、移り変わるステージごとに必要な支援を届け続ける必要がある。わずか半年でその叫び声がな

くなることは有り得ない。ましてや、聴こえない、聴かないことが原因で、これ以上の不幸が起こることがあってはならない。その防止策として誰も

ができることは、「東日本大震災を風化させない。被災者を思い続ける。」ことが最低ラインだと考えている。